【一般演題Ⅱ】

排便習慣に合わせた全大腸内視鏡検査前処置法の検討

社会医療法人恒心会　恒心会おぐら病院
〇坂本　好美

【研究目的】

全大腸内視鏡検査を受ける患者の中には、追加で処置をする例（以下、前処置不良群）や、検査を中断する例もある。前処置不良の要因として、普段の排便習慣が影響しているという報告を参考に、A施設における検査の実態を調査した。前処置不良群は20％、排便周期は平均2.3日（SD0.67）、来院までの排便回数は平均5.6回で、予定通りに検査ができた例（以下、前処置良好群）の排便周期は平均0.97日（SD0.43）、来院までの排便回数は平均10.45回であった。

本研究の目的は、排便周期が2日以上の患者に対する新たな前処置方法（検査２日前にピコルーラ®２錠服用）により、前処置不良群が減少するかを明らかにすることである。

【研究方法】

１．研究対象：排便周期が２日以上で、研究参加に同意が得られた患者50名
２．データ収集期間：2022年11月～2023年2月
３．データ収集・分析方法

前処置良好群と前処置不良群に分け、属性、年齢層、平均年齢、排便周期、来院までの排便回数について整理する。前処置良好群の排便周期を、先行調査と比較検討する。（有意差５％）前処置不良群の影響因子を探索する。

【倫理的配慮】

法人倫理委員会の承認を得た。研究参加者には文書で、研究主旨を説明し同意を得た。

【結果】

対象は50名で、平均年齢は65.56歳であり、前処置良好群は44名、前処置不良群は6名であった。

前処置良好群は男性23名、女性21名で、平均年齢は64.57歳であった。排便周期は平均2.61日（SD0.81）であった。先行調査では平均0.97日で、両者の間では有意差がみられた。来院までの排便回数は平均8.3回であった。

前処置不良群は男性２名、女性４名で、平均年齢は72.8歳であった。排便周期は、平均3.8日（SD0.41）であった。先行調査では平均2.3日で、1.5日長かった。来院までの排便回数は平均5.2回であった。５名は下剤の服用中止や、検査で大腸疾患が判明した例があった。

前処置不良群は、前処置良好群に比べ、排便周期が1.19日長く、来院までの排便回数は3.1回少なかった。

【考察】

前処置良好群における平均排便周期は、先行調査では、0.97日でほぼ毎日排便が認められた患者であったが、本調査では2.61日に延長しており、有意差が認められたことから、検査の２日前に下剤を内服する方法は、大腸内視鏡検査前の処置として効果があったと言える。また、排便は、一般的に食後24時間～72時間（１～３日）で排泄されることから、２日前に下剤を内服することは、腸蠕動を促進し排便を促したと考える。

【結論】

新たな前処置方法は、腸蠕動運動を促進し、来院までの排便回数を増加させ、前処置不良群の減少につながった。

【連絡先：〒893-0023　鹿児島県鹿屋市笠原町27-22　TEL0994-44-7171】